

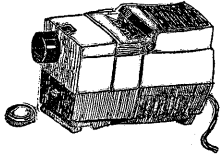
滋賀県農業試験場(試験場亀研究所めぐり118)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	山浦, 実
巻/号	31巻10号
掲載ページ	p. 466-467
発行年月	1976年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



滋賀県農業試験場の巻



(試験場・研究所めぐり 118)

農業試験場は、昭和49年8月に草津市から蒲生郡安土町大中に新築移転をした。当時は明治11年滋賀郡別所村(現大津市)に県植物園として設置され、翌年農事試験場と改称されたのが始まりである。その後、明治28年同郡膳所村(現大津市)、さらに昭和3年栗太郡治田村(現草津市)と、2回の移転を経て、今回安土町に移って来たもので、明後年には創立百年を迎える古い歴史を持っている。この間、稲萎縮病を対象とした世界で最初の植物ウイルス虫媒伝染発見を始めとして、水稻新品種の育成、稲麴病伝染経路の解明と防除法の確立、徳肥の研究など数多くの業績をあげ、農業技術の発展に寄与してきた。

新しく移転した安土町大中は、びわ湖最大の内湖の干拓地で、面積は1,300haあり、戦後干拓に着手、昭和39年に干陸し、同41年から214戸の入植が行われた。入植者はすべて専業農家で、1戸当り4haの水田を基盤に、水稻と畜産(肉牛肥育等)、野菜作との複合経営を行っており、本県農業の中心地とも言える地域である。

農業試験場がこの地に移転を決定したのは昭和45年で、翌46年には場整備にかかり、49年の本館完成まで3年余りの年月と8億数千万円の経費を投じて完成した。

安土町はかつて織田信長の居城のあった所で、今でも城跡の石垣その他往時をしのばせるものが町内随所にみられる。また、付近には安土城跡を始めとして、沙々貴神社、総見寺、観音正寺、桑実寺、風土記の丘などがあり、歴史散歩としゃれこめば名所旧跡にはこと欠かない。なお当場に隣接して「大中の湖南遺跡」がある。

新設なった場の概要は次のとおりである。用地は16haで、建物敷地3ha、ほ場面積13ha、うち70aは野菜関係のほ場として利用されている。ほ場は干拓地のため排水がよくなかったため、すべて5m間隔に暗渠排水工事をやっている。また水田用水はすべてパイプ送水で、各試験ほ場のバルブをひねれば容易に給水されるようになっており、道路も6m幅の幹線と3mの支線が縦横に走っていて、極めてよく整備されている。

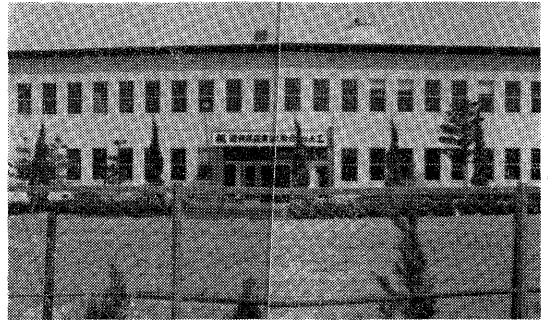
本館は南面し、東西84m、西北26mのコンクリート二階建てで、延面積は約3,000m²。本館1階は場長室、管理部事務室、栽培部研究室、大小会議室、栽培部実験室、

機械室(電気、冷暖房機)となっており、2階には総合技術部、環境部研究室、化学・病理昆虫関係実験室、図書室などがある。施設棟としては、ガラス室、鉄骨ビニールハウス等7棟のほか、調査作業棟、農機収納庫、籾乾燥調整棟などが16棟、計4,200m²建てられている。

試験場が干拓地にあるだけに、化学実験関係の排水や汚水処理にはとくに意を用い、廃液処理施設を整備し、またドラフトから出るガスも水による洗滌排水装置を設けるなど、公害防止には万全を期している。

その他の施設としては、人工気象室、公害実験チャンパー(有害ガス処理)、ライシメータ、水稻育種用日長調節施設、自動気象観測装置、グロースキャビネット等が主なものである。

場の機構人事 場移転を機会に機構も一部改変整備された。愛知郡愛知川町にあった湖東原種農場を廃止し



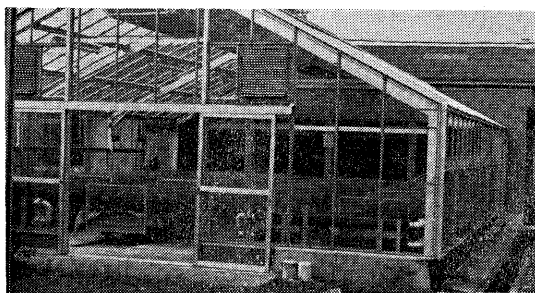
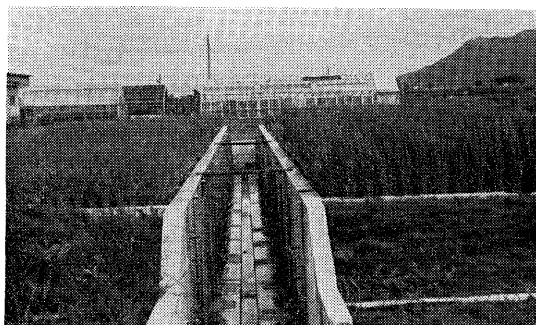
て、本場栽培部に統合し、また園芸部に所属していた野菜係を栽培部に組入れて本場に移し、園芸部は本場との距離が離れたこともあって園芸分場と改めた。この結果場の組織は4部3分場制となった。

場長は山仲巖、植物病理専門の場生え抜き生粋の技術者である。次長は神島健次郎。管理部(部長:次長兼務)庶務係、管理係。栽培部(部長:河合利雄)、作物係、原種係、野菜係。環境部(部長:中田均)、作物栄養係、環境保全係、病理昆虫係、発生予察係。総合技術部(部長:園孝一)経営企画係、土壌調査係、施設機械係。園芸分場(分場長:久保真和)、花き係、果樹係、場所:栗太郡栗東町荒張(東海道本線草津駅よりバス浅柄野下車)。湖北分場(分場長:西村佐吉郎)、場所:伊香郡木

* 山仲巖場長の近影(上の写真)と本館正面玄関風景。

之本区千田(北陸本線木之本駅下車徒歩15分)。湖西分場(分場長:吉川善司),場所:高島郡安曇川町田中(湖西線安曇川駅下車徒歩5分)。

最近の業績 (1) 新品種の育成 戦前から多くの品種を育成してきたが、近年育成したのものとして早生種「びわみのり」(昭和46年)、極早生種「びわひかり」(昭和47年)があり、いずれも県奨励品種として県内で栽培されている。(2) 水稲多収阻害要因対策試験 全場的に取組んだ大型試験で、栽培、施肥、病虫等の各分野から生産阻害要因を解明し、生産向上のための基礎的技術を確立した。(3) イネ黄化萎縮病防除に関する研究 昭和29年から研究に着手、同36年には指定試験となり、本病の



生理、生態防除について大きな進歩をもたらした。(4) 茎頂培養によるカーネーション無病苗の育成 ウィルスフリー株の育成と増殖を行ない、県内栽培業者の生産向上に大きな貢献をした。(5) 水稲大規模育苗方式の確立 機械植に伴う大量育苗技術を確立した。(6) カーネーション長期無仮植栽培技術の確立 春秋2回植による1年半栽培技術を確立し、省力、労力分散、収量向上に大きな効果をあげた。

現在実施中の主要研究課題 (1) 水稲関係 良質米の多収を目標に品種改良ならびに選抜試験を行っている。栽培試験としては、直播栽培、除草剤、豊凶参照試験のほか、稲麦輪作体系試験等がある。このほか、黒点米防除試験、カーバメイト薬剤耐性ツマグロヨコバイ対策試

験等も重要試験である。(2) 園芸関係・やさい 滋賀県の冬期間の気象は、北陸型で日照時数が少ない。このため「冬期寡日照地帯の施設栽培試験」を継続している。このほかイチゴ、キャベツ等の栽培試験のほか、露地野菜の機械化のためにキャベツ収穫機や収穫物運搬機の試作を行っている。(3) 花き カーネーション、バラ、キク関係の栽培試験が多いが、本年から更にもみがら培地による「培地の簡易標準化試験」を開始した。(4) 果樹 カキ、ナシ、ブドウ等の一般栽培試験のほか、「高効率カキ園形成試験」にとり組んでいる。

その他、農業廃棄物利用試験として、もみがらの利用開発、家畜排泄物土壌還元試験を行っている。環境保全関係試験としては、土壌汚染防止、工場排水による農作物被害防止、農薬残留防止試験等がある。また昨年度から、水田用水多目的利用基本調査を5年計画で始めた。

試験研究の成果は、試験成績概要その他によって、普及組織を通して農家に伝達され利用されているが、そのほか、当场では毎年2月に研究発表会、新技術発表会を行って、普及員、農協営農指導員、県市町村行政担当者、一般農家に直接成果を伝えるよう努めている。研究発表会は、各分野における成績を担当者が発表するもので、学会のように断片的なものであるが、新技術発表会は、その時の重要問題をテーマに体系づけて発表解説するものである。今年は「米の品質と収穫および乾燥調整」「家畜排泄物の耕地還元」の2課題をとり上げた。

そのほか、当场には「はるた会」という団体があって、月刊誌「滋賀の農業」や農業技術指導書の刊行を行っている。「滋賀の農業」は昭和11年に創刊され、以来41年の間、戦争中も紙の特配を受けて休むことなく今日まで続いて来た。誌面には当场の試験成績紹介を中心として、一般農業指導記事を掲載しているが、これが、試験場と農家を直接結ぶ大きなきずなとなっている。

× × × ×

場への道順は、東海道本線安土駅下車。場までの距離約5km。バス等の便はない。駅前からのタクシー利用が最も便利である。

(M.Y生)

.....
東大教授 農博 松尾孝嶺編

稲の形態と機能

一稲作多収の基礎理論—

A6判 上製 235頁 定価 705円 千200円

主要目次: I編 稲の形態形成 II編 稲の形態と栄養 III編 同化作用と物質生産 IV編 形態と機能からみた多収性品種

* ラインメーター(上の写真)とオノ稲世代促進の育種温室